

二月の法座・行事

- 二日・実如上人御祥月御命日
- 六日・彰如上人御祥月御命日
- 八日・現如上人御祥月御命日
- 十二日・闡如上人御逮夜・常永代経
(午後一時半)
- ・同朋の会例会
(午後二時)
- 十三日・闡如上人御命日
(午前八時)
- 二十二日・常如上人御祥月御命日
- 二十四日・正信偈書写の会
(午前十時)
- ・定例法話
大阪教区第十一組
浄教寺
松尾 陽子 師
(午後一時半)
- 二十五日・善如上人御祥月御命日
- 二十七日・宗祖聖人御逮夜
(午後二時)
- 二十八日・宗祖聖人御命日
(午前八時)

◆仏前結婚式

二〇一六年十二月十日天満別院においてエリオ・エスぺホ様、藤本 清香様の仏前結婚式を執り行いました。

また二〇一七年一月二十一日に多田 恵之様、神野 郁子様のお仏前結婚式を執り行いました。

ご結婚おめでとうございます。

別院では仏前結婚式を随時受け付けております。寺院関係の方々だけでなくご門徒の方々の挙式もご遠慮なくお申し込みください。

霊園・墓石



太田石材店

本社 〒536-0001
大阪府城東区古市1丁目23番20号

本店 〒530-0042
大阪府北区天満橋1丁目2番18

TEL 06-6930-5075
0120-30-5075
FAX 06-6930-5078

如来すなわち
涅槃なり
涅槃を仏性と
なづけたり
(法語カレンダー)より

六字城

発行

真宗大谷派(東本願寺) 天満別院
大阪市北区東天満一丁目八二番六

電話 六三五一―三五三五
代表者 輪 番 長谷山法雄

「和讃のおはな」

真宗大谷派 鍵役
宣心院 大谷 暢文

『諸経讃(七)』

如来すなわち涅槃なり
涅槃を仏性となづけたり
凡地にしてはさとられず
安養にいたりて証すべし

(如来というのは、すなわち涅槃ということであり、その涅槃を仏性と名づけているのであります。凡夫の境涯ではこの世においては悟ることができず、阿弥陀さまのお力によってお浄土において悟りを得ることができるのです。)

このご和讃も『涅槃経』によって詠われたご和讃です。その『涅槃経』を引用されたところは「如来はすなわち涅槃なり、涅槃はすなわちこれ無尽なり、無尽すなわちこれ仏性なり、仏性すなわちこれ決定なり、決定すなわちこれ阿耨多羅三藐三菩提なり」とあります。

比叡山におられた頃から親鸞聖人にとって「仏性」は大きな関心事のひとつだったようです。もちろん「仏性」については親鸞聖人だけでなく、仏道を歩む者なら誰もが心して頂いている言葉です。しかし、その捉え方は人それぞれと言っていいでしょう。その中で親鸞聖人は『涅槃経』によって仏性を明確に抑えていかれました。それがご和讃にも見ら

れるように「仏性」とは最高の悟りである「涅槃」であり、そして「如来」のことであると抑えられました。さらにその最高の悟りは、この娑婆世界に生きる凡夫には、到底得る事ができず、阿弥陀さまのいらつしやるお浄土において初めて悟ることができるのだと了解されたのであります。前回の和讃が、慈悲あるいは利他の面を示すとすれば、このご和讃は智慧あるいは自利の面を示すと見ることができます。

第一句目の「如来すなわち涅槃なり」は、『涅槃経』の文をそのまま頂いておられます。「涅槃」とはサンスクリット語の「ニルバーナ」の音写であり、漢字から意味は伺えませんが、漢訳されたも

のは「滅度」とあらわされます。「滅度」とは「煩惱悪業を滅して苦しみの果を度（わた）る」の意味です。そしてこれが「仏性」の意味でもあるのです。

この「仏性」の意味でもある「煩惱悪業を滅して苦しみの果を度る」を見たらば、到底この娑婆世界に生きる凡夫ごときがいくら努力しても得られないものだということが容易にわかるのではないのでしょうか。それを親鸞聖人は「凡地にしてはさとられず」と詠われたのです。

それでは、私たち凡夫はどうすれば「煩惱悪業を滅して苦しみの果を度る」ことができるのでしょうか。それは阿弥陀さまにすべてをお任せするしかないのです。すべてをお任せすることは、まさに阿弥陀さまを疑いなく信ずることです。それが第四句目の「安養にいたりて証すべし」にあらわされています。

◆天満別院新年互礼会

去る一月二十九日、芝苑に於きまして、平成二十九年天満別院新年互礼会を開催いたしました。

開会の言葉の後、輪番挨拶があり、引き続き天満別院責任役員奥林 曉氏から新年のご挨拶を述べられました。その後天満別院門徒会会長の宇野 善昭氏が乾杯の音頭をとられ、会食歓談となりました。



最後には、天満別院責任役員の榎屋 義雄氏より、閉会の言葉があり、お開きとなりました。



今年度も、新年を迎えるにあたり、多数のご参加をいただき、盛大になごやかな一時を過ごすことができました事を御礼申し上げます。

◆御礼

一月二十四日、毎年の恒例となっております、定例法話後の天満別院婦人部の皆様による「ぜんざい」のご接待に多数のご参加をいただきありがとうございます。



天満別院婦人部の皆様、また、お手伝いをいただきました方々に厚く御礼申し上げます。



輪番雑感

二月三日が節分。この行事は古くから宮中であつたようだ。現在は家庭、保育園、学校、神社等で「福は内、鬼は外」と言いながら豆を撒く。豆は健康を意味する。

私の田舎（北九州地方）では、「豆ろ

しい」とか「あの人は小まめ」という方言がある。健康でよく気がついて働く人のことを言う。

節分に、福の神は我が家に、悪者の鬼は我が家から出て行けという。鬼とは自分にとって都合の悪いこと（病気・事故・災難・死など）、そして家内安全、無病息災を願う。よく考えてみるとこれほど自分勝手、自己中心的で己の利益幸せを願っていることはないでしょう。これが私の本音です。

この日、鬼さんが言いました。「私を追い出そうとする人こそ鬼です。鬼はほかにはいない、鬼が鬼と気付かぬ人こそ本物の鬼ですよ」と。かたや福の神が言いました。「福の神とて別にいない。鬼は私自身と気付く人こそが福の神」と。「平和な仲睦ましい家とは家族の中に、自分が鬼であることに一人気付いた人がいる家だ」という。われは是（よし）彼は非（あし）とする家内（いえうち）は我他彼此（がたひし）する。鬼は誰れ、「外ではなかつたわたしでありました」と一人でも気付けば家は明るくなる。このことに気付くような豆撒きであつてほしい。